

The top's dream

思うようにいかないのが世の常。 愚直に、自分の信じることを重ねていくだけ。



お客様のニーズに応える

大矢商事株式会社は、電気冷蔵庫があまり普及していない昭和37年に、アイスクリーム・アイスキャンディー用ドライアイス販売店として小山市で創業。前身は練炭などの燃料販売店で、夏場の暇時を補うために先代である父親が始めた事業。2歳の時に、大口販売先である宇都宮市内の取引会社の近くに支店を開設、両親に連れられ引越す。また販売しか行っておらず、東京の赤羽辺りまで、オート三輪車で毎日片道10時間ちかくかけて仕入れに行っていたそう。そして、24時間体制で夜中でも対応し、両親が配達で留守の時は、小学生の大矢氏も見よう見まねでドライアイスを扱いきりばしに手伝っていた。

ところが、フリーザーの普及で需要がほぼゼロという、業界にとって厳しい時代がくる。「なんとか立ち消えないですんだのは、その大口取引会社様との距離的な利点で優位を發揮したから」と。確かに、お客様の目と鼻の先に店を構えて、距離的優位性はあったかもしれないが、それ以上に、お客様のニーズに家族総動員で応えようという姿勢が、確かな信頼を生み、良好な関係を築いたからにちがいない。やがて、宅配やテイクアウト用として再びドライアイスの需要が伸びてきた。販売だけではなく製造も手がけるようになり、5年前からは、食品や工業製品の低温輸送など幅広い分野での、低温物流のお手強い商社として実績を上げるようになった。

地域の中で育つ

「当時の宇都宮市天神町は、人情味あふれる下町で、家が忙しかつたせいもあって、地域の人に育ててもらった。地域には、子どもたちの居場所がいっぱいあった」と幸せそうに懐かしそうに語る。お使いで駄賃をもらったり、家が忙しい時には食事や風呂の世話もしてもらったり、叱られた時の避難場所だったり、家族のように接してもらっていたという。畑の野菜も、自由にもらったり、やったり。一方で、ダメなものはダメと本気で叱られ、社会的なマナーも地域の人に教えられたそう。

今も育った街でマンション暮らしをしているが、今昔の変化に戸惑っている様子。特に、入居者の3分の1は、他人との係わりがイヤで越してきたという事実が愕然としている。そんな中にもあつても、率先して挨拶をし、声がけをするようにしている。「物質的には豊かになったかもしれないけど、人との交流、絆という大切なものを忘れてきてしまったのでは。人は大事。お金では買えない関係」と。

会社でも、家庭でも、地域社会においても、大矢氏は貫いて積極的に人と係わり、人間としての礼節を説く。「変な使命感なんです。正直、言えは言うけど、自らも律しなさいといけないから大変なんですけど」と言いつつ、先人達から学び受け継いだ美德を、次の世代に継承することにはためらいはないようだ。

人間としての土台づくり

小学生から高校生まで野球に全力を注ぎ、いつしかプロ野球選手か教師として野球指導をすることが目標になっていた。当然、大学の野球修業が前提だったが、肩の故障で叶わず、学校推薦で進学。目標もなくなったが、漫然と大学に行き続けることができず、2年間で中退。厳しい母から実家の敷居をまたがせてもらえず、3年間祖父の運送会社で勤務し、大型免許も取得して仕事に励んだ。そして、23歳で家業の会社に入社。現在に至る。

「当時の失敗も含めた経験から、大矢氏は「亡くなった母も口癖のように言っていたが、思うようにいかないのが世の常。愚直に、自分の信じることを重ねていくだけ。心技体が満ちてこそ、力まないで自分の能力が発揮される」と、あたかも自らを諭すようににかみ締めるように言う。何をしたいのかを明確化し、自分の信ずる理念に基づいて、具体的に目標に向かつて積み重ねていくという生き方が大矢流。これは、宇都宮青年会議所時代に培ったこと。

そして、TPOに合わせた物事の見方や判断は、野球を通して学んだもの。12歳ですでに170cmという恵まれた体格と、肩の強さ、足の速さを生かし、ピッチャーでキャプテンという花形のポジションをキープしていたが、高校では、監督の指名でキャッチャーに。「キャッチャーになって改めて野球の素晴らしさを知った」と言うほど、その後の生き方にも大きく影響することとなった。それは、物事を俯瞰視する能力が備わり、状況によってベストな対処が変わってくるということ。「キャッチャーは、全体を見て判断し、その時に一番いい球を選択する」と。その時に一番いい判断を下す習性は、ビジネスでもプライベートでも生かされている。その能力を買われ、さまざまな要職に召還される。

そして今、大矢氏の望みは「いい仕事、クオリティの高い仕事をする。そして、新たなものを切り拓いていくよりも、継承していくこと」。いい仕事とは、業務内容だけではなく、社員やその家族が豊かに暮らしていけるように付加価値の高い仕事の仕方。そのためにも、健康、感謝の気持ち、尊敬の念、謙虚さといった人間としての土台が大切と、どこまでも「人・絆」を第一に説く。

1日3時間程度の睡眠で、深夜の配達を一手に担い、仕事の合間を縫って、通信制で経営学を学び、海外進出も視野に入れて英語にもチャレンジ中。まさに、自分の信ずることを愚直に実践中なのだ。

Profile

おおや やすひろ
大矢 裕啓



昭和35年5月5日生まれ54歳。三人兄弟妹の長男として小山市に生まれるが、37年に宇都宮支店開設に伴い転居、中心市街地で幼少から青年期まで過ごす。栃木県立宇都宮商業高等学校を経て横浜商科大学経営学部に進学、中退。3年間祖父の運送会社で勤務の後、23歳で大矢商事(株)に入社、平成7年7月7日に3代目として現職に就く。公益社団法人宇都宮青年会議所理事長、栃木県PTA連合会会長、宇都宮市教育委員等要職を歴任。2人の娘さんが進学で家を離れ、貴重な休日には夫婦2人の時間と大好きなゴルフを愉しんでいる。

【取材日：平成26年7月7日】